

時代の趨勢

佐藤克廣

「国會議員に一番近い仕事は運転代行ではないかと。運転代行と国會議員はどちらもハンドルを握って国民の望む方向へ、望む速度で安全に連れていく仕事なので。」（韓国TVドラマ『偉大なシヨ』第一回）二期目選挙で落選した主人公が運転代行で糊口を凌いでいる時の台詞である。一見もつともらしいが、運転代行と国會議員は政治家の仕事は同類だろうか。運転代行のお客はほぼ一人で、行き先も目的も明瞭である。これに対し政治家が相手にするのは多数の人々である。人々が政治家に望む方向や望む速度は一定ではない。人々の志向がバラバラであることは、現代社会においては必ずしも悪いことではない。いろんな志向の人々がいるからこそ社会は成り立っている。共通項といえば「家族みんなが幸せに暮らしたい」「身体を壊してまで働かなくても普通に暮らせるようになりたい」等々である。「幸せ」や「普通」は良い言葉ではあるが、抽象的でつかみ所がない。バラバラで抽象的な志向をうまくまとめ社会全体の舵取りをする必要がある。そうしないと社会は対立と紛争の場になってしまう。運転代行と政治家との違いはまさにここにある。政治家の場合にはただ国民の言うことを聞いて安全運転していれば良いとは言えない。バラバラになりがちな人々の声を聞きつつも紛争

にならないようにまとめる力も必要になる。昨今の政治家は支持してくれる人々の声を聞くことには長けていそうである。ただし、社会をまとめようとする気配はあまり感じない。むしろバラバラで分断されている方が統治には都合が良いと考えている節がある。権力を維持し簒奪されるのを防ぐには人々を分断したままそれぞれを戦わせている方が合理的であるとする古典的統治感から抜け出していない。反対者はいるはずなのになぜ権力者に従う支持者が時代を席巻してしまうのか。巧妙に仕組まれた罠がそこには潜んでいる可能性がある。小樽商科大学名誉教授荻野富士夫氏が「内なる敵」の排除について語っている（朝日新聞 10月10日）。治安維持法制定で増強された公安警察部門は、組織維持のため次々とその「標的」である「内なる敵」を作っていく。これは真面目な行政官の習性とも言える。ところが、それにもまして荻野氏が強調するのは、「世間」一般の人々が一定の人々に「非国民」とレッテルを貼り社会的統制をしていたことである。歴史家の益田肇氏は、人々がそれまで不愉快に感じていたことを「国防」論で批判できるようにになり、平時にはできなかった規律を整えることが戦時の論理で可能になったと述べる（朝日新聞 10月1日）。「大正デモクラシー」での「解放」への反動として「引き

締め」が起きたというのである。この「解放」と「引き締め」をめぐる戦いを益田氏は「社会戦争」と名付けている。

個々人の属性を同等に扱う「解放」で多くの人が「幸せ」に暮らせているなら、わざわざ「敵」を作って排除することにエネルギーを注ぐ必要はない。幸せではないと感じる人々はその原因が気になる。原因の矛先を政治や政府に向けられたら権力者はたまらない。多くの人々を「幸せ」にできれば良いのだが、それはなかなか難しい。ならば分断して多くの庶民の溜飲を下げられるようにすれば良い。かくして、分断と「敵」の排除をめざす「社会戦争」が画策される。「スパイ防止法」の制定を目指す政権は「社会戦争」を画策しているとも言える。ただ、その行き着く先は、「誰のおかげで幸せに暮らしているのか、誰が敵なのかを徹底的に教え・・・最高指導者への忠誠心を高めようと躍起になっている」北朝鮮（朝日新聞 10月29日）が、破綻した政府政策から目をそらすための対外戦争しかなくなるのではないか。

「平和とは戦争と戦争の間のつかの間の安らぎである」とは誰の物言いか記憶にない。一般には「しばらくの間」「さしあたり」といった意味で使われる「当分の間」が法律用語として使われた場合には改正や廃止がおこなわれない限り半永久的に効力を持つとされる。最近話題の「暫定」も似たようなものである。この際「つかの間」の平和は日本の法解釈流に「当分の間」「暫定的に」続いてほしいものである。

へさとう かつひろ・北海学園大学名誉教授／当研究所顧問